新宿区立あゆみの家は、平成24年4月から社会福祉法人　新宿区障害者福祉協会が管理・運営しています

編集・発行：新宿区立あゆみの家

元気にマジメに笑顔をつなぐ

あゆみだより

2016年7月15日発行

No.204

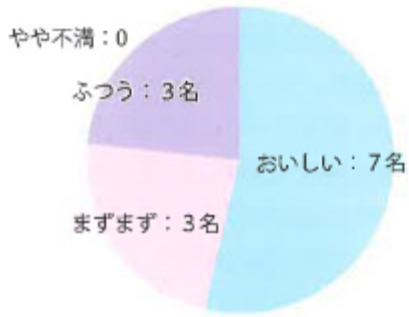
バイキング形式で試食会

保護者の皆さんは、高い関心

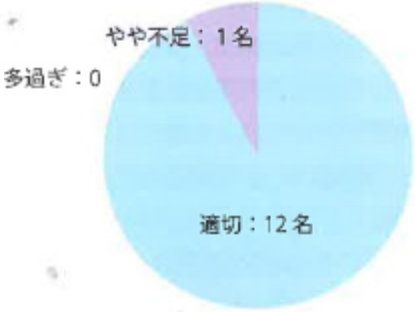
毎月開かれているグループ保護者会のあった5月7日に「給食の試食会」を開催しました。当日はあいにくの雨でしたが、参加された保護者の皆さんは興味津々でした。

会場に入ると利用者のこの日の昼食のメニュー（選択食）がバイキング形式で並べられ、保護者の皆さんは思い思いに様々な食形態を試食してみました。今年から変わった給食の委託会社からは栄養士と担当社員も参加して質問に答えていましたが、会社が用意したアンケートの結果を見ると全体的な印象は良かったようです。

●質問：料理の味付けはいかが？



●質問：料理のボリュームはいかが？



今年から委託業者を変更したポイント（期待）は、「咀嚼や嚥下機能の低下に対する取り組みとしてソフト食、ムース食の提案」、「誕生日食や行事食等の生活感の工夫」「主菜に選択食を取り入れていること」でしたが、アンケートの自由記述欄にもそれにつながる意見や感想がありました。

当日参加した皆さんの声

- 選択食はとても楽しみです。家庭の食事もマンネリ化しているので時々レシピを教えてください。
- ムース食、ソフト食が導入された際には、また試食会をお願いします。
- ソフト食に興味があります。食べることが大好きな子なので普通食より少し柔らいものが望ましいです。
- 味付けも薄味で優しい味で食べやすかったです。美味でした！
- ペースト色の量が少なめだったので伺ったところ「普通食と同じ量ですよ」と聞いて安心しました。
- メニューは和洋中とバランスよくおいしそうです。普通食でも柔らかめに仕上がっていて安心しました。
- 試食会は本人の気分で食べている感じがして良かったです。本人は肉類が好きなようです。
- いつも美味しくいただいて帰宅してからその日のメニューを教えてくれます。これからも心のこもった美味しい給食をお願いいたします。
- ペースト食を初めていただきました。ピラフがおかゆと別に分けてあって、たいへんおいしかったです。
- ピラフの再調理に興味があり参加しました。もう一段「極きざみ」を増やして少しツブツブの残る食感の形態があればと思いました。

●あゆみだより：編集・発行／新宿区立あゆみの家　電話（3953）1230・FAX（3953）1053
●メール　ayuminoie@pony.ocn.ne.jp　ホームページ　http://ayuminoie.org　検索「施設概要　あゆみの家」と入力して下さい。

あゆみの家の
これからを考える第一歩

あゆみの家は区の直営施設から社会福祉法人の運営に移行して今年で5年目です。今年は契約期間の最終年度になるので来年以後の第2期の契約に向けて、この5年間を振り返って実績や課題、次の5年間の運営についての提案を新宿区にしていきます。

そこで今回はちょっとお堅い話になりますが、今、あゆみの家で起こっていること（課題）とそれに対して現場の職員はどう考え行動しようとしているのか、「あゆみの家のこれからを考える第一歩」について報告します。

今、あゆみの家で起こっていること

昨年度の利用者満足度調査の結果によると、「あゆみの家にずっと通わせたいと思うか」という質問に96%の方が「すごくそう思う」か「ややそう思う」という意見でした。法人も使命として「重度、重症の障害者であっても住み慣れた地域でその人らしい地域生活、自立生活を支援すること」を掲げているので、この結果はとてもうれしいです。

しかし、一方では高齢化による二次障害や重度化が進み、医療型と呼ばれる「療育センター」でないと対応が難しいと思われる方もいます。（「療育センター」とは、医師が常駐して「医療やリハビリ」の支援体制が整っている施設のことで、新宿区内にはなく、ほとんどは都立施設です。）

元々あゆみの家の運営を受託するにあたっては「利用者の高齢化や重度化への対応」は避けて通れない問題でいずれしっかり取り組まなければと考えていましたが、この問題は将来の課題ではなく、現在進行形の問題なんだと考えさせられる事態が相次いで生じています。

まず、今、あゆみの家で起こっていることは何か…。

◆A利用者：進行性の障害を持つ方で最近は通所バス内のむせがひどくなり、バス利用に不安が増している。通所バスはやめて自主通所に変更すべきだろうか。

◆B利用者：痰の吸引について主治医の指示書どおりの方法では安全で十分な対応ができないという不安がある。

◆C利用者：最近、胃瘻を増設。グループには既に医療的ケアの頻度が高い利用者がいるので、今後、通所日数を減らされてしまうのではないかという不安がある。

◆D利用者：今までは酸素投与のみだったが、24時間人工呼吸器使用となった。今後の利用には通所日数の減少や保護者によるケアの提供や所内待機が通所条件になった。

◆E利用者：入所申請が出ている方で、現在は感染症は発症していないが感染症の保菌状態にある。感染症への抵抗力がとても弱い利用者のいるあゆみの家でどこまで受け入れ可能なのか、何人か専門家（医師）に相談すると、入所の是非や入所後の対応方法について見解が異なりました。

こうした事態に直面した利用者は、「あゆみの家か、在宅か、療育センターへ移籍か」という選択を迫られることになります。仮にあゆみの家の利用継続が可能になった場合でも、設備や職員体制を理由に通所日数の減少や保護者の付添や待機、プログラムの参加制限をお願いしなければならない事態も予想されます。こんな事態を想定した利用制限のルールや基準は、まだ用意されていません。

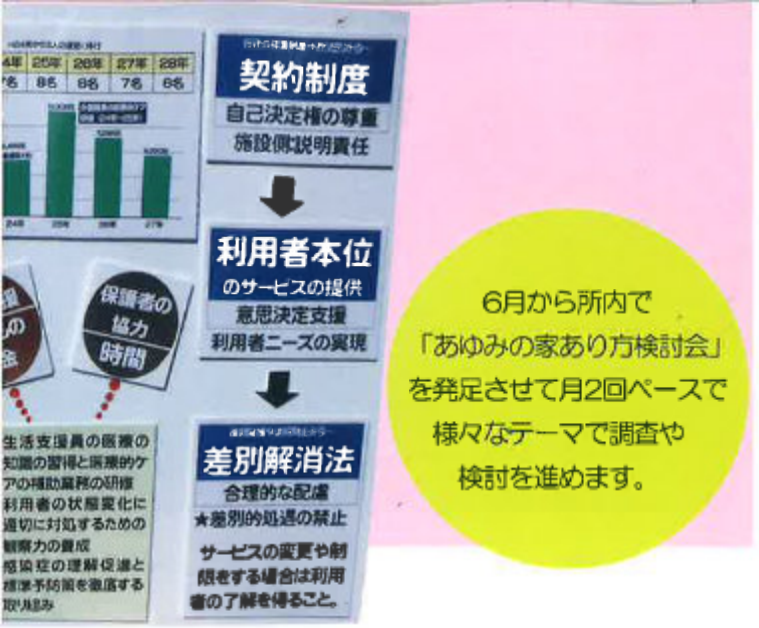
あゆみの継続利用は諦めて療育センターへの移籍による通所を希望するとどうなるか。東京都は、療育センターを新設しない方針で既存の療育センターに中途入所の問い合わせをしても「情報開示はしていません」とか「当分の間、受入予定はありません」という返事が返ってくるだけで移籍は簡単ではありません。

結局、「あゆみの家か、在宅か」という選択になります。そうなると在宅の生活に希望を持てないと考える保護者は、医療的ケアにつながる治療や登録をギリギリまで先送りする苦渋の選択をすることになります。

あゆみの家にできること、できないこと

「あゆみの家にずっと通わせたい」という皆さんの願いに応えること。また、「あゆみの家は、重度・重症者にその人らしい日中生活と社会参加の場を提供する、最後の砦として期待に応えてきた」という歴史を踏まえ、今、あゆみの家にできること、できないことは何なのか。そこでこんなことを考えてみました。

障害の重度化に直面してもあゆみの家で受け入れや利用継続ができるようにするために、あゆみの家が「療育センター」と「生活介護」の中間施設として役割を担うことはできないのだろうか？



あゆみの家
- 生活介護の日中活動プログラムが中心。
- 医師、ＰＴ等専門職は、嘱託契約か非常勤雇用

↕

中間施設
- 生活介護施設だが医療支援やリハビリも拡充
- ＰＴ等の専門職は常駐だが、医師は嘱託契約。

↕

療育センター
- 医療やリハビリが中心
- 医師やＰＴ等専門職の常駐

「できるか、できないかでなく、どうしたらできるかという姿勢で受け止めていこう！今からできること、すべきことを考えよう！」という職員がいます。「自分たちのレベルではとてもできない。今でもギリギリでやっているのにこれ以上の無理を強いるべきではない！」という職員もいて議論は平行線です。

ここでは前者の立場で、これからあゆみの家でできること、すべきことは何かを考えてみます。そこでふたつ。

① 医療事故や所内感染リスクへの対応策の徹底

② 福祉（介護）と医療の連携・協働体制作り

そのため具体的にどんな取り組みをするのかといえば、

① 生活支援員向けに医療の知識の習得と医療的ケアの補助業務ができる研修を実施する。

② 生活支援員に対して利用者の状態変化に適切に対応できる観察力を養成する研修や現場指導に取り組む。

③ 感染症の理解促進と標準予防策を徹底する取り組み。

これらの取り組みを進めて、実のあるものにするためには新宿区と父母会の協力や支援も必要です。例えば…、

- 区の支援：ひと、もの、お金の支援⇒職員配置の充足、設備の拡充、そのための予算措置。
- 保護者の支援：時間確保のための協力　⇒職員の研修、ケース会議、支援記録や報告書作成等に使える時間の確保。年に何日か、半日通所日を設けて時間を捻出する。

※何故なら…区直営時代には夏休みと春休みで年間10日ありましたが、現在はゼロです。また、法人運営になって利用者支援時間を毎日30分延長していますが年間換算すると15日分です。これで利用者サービスの向上につながった反面、職員は、年間で25日分、研修や会議、事務仕事の時間が削減される環境で働くことになりました。

中間施設のメリットとデメリット

施設の方向性として「中間施設化」を考えてみましたが、良いこと尽くめではありません。

●期待されるメリットは…
- 健康管理が強化されて、より安心・安全な施設になる。
- 医療やリハビリに対する介護職員の観察力や支援力（スキル）が上がる。
- 医療事故や所内感染のリスクが少なくなり、看護師が安心して働ける。

●心配されるデメリットは…
- 通所日数、滞在時間の短縮や自主登所等の利用制限が生じる利用者が出てしまう。
- 施設が負うリスクに応じて保護者によるケアの提供や付添を求めることがある。
- 個室対応、行事（遠距離の外出、夜間の外食等）への参加不可や制限をお願いする利用者が出てしまう。

この課題について考える場合に忘れてはいけない大切なことがあります。それは何か…。

障害者の通所　施設の利用は、かつては措置制度の下に行われましたが、現在は契約制度の下で行われていて、この間に事業者と利用者の関係が大きく変わった点です。

◆措置制度：行政の裁量で利用許可や処遇の変更（サービス内容や方法の変更）が行われていました。

◆契約制度：事業者と利用者は、契約関係にあり利用者の選択や自己決定の尊重と契約者双方の合意のもとに処遇の変更も行われる仕組みになりました。変更する場合には事業者には十分な説明責任が求められます。

さらに近年は、権利擁護や「障害者差別解消法」により、事業者側には合理的配慮が求められています。障害者サービスの提供にあたり、正当な理由がない場合に差別的処遇につながる可能性がある例として国の指針では次の対応に注意を喚起しています。

- サービス提供時間の変更や制限
- 別室、個室での処遇等の場所の限定
- 保護者の同伴や待機を利用条件にすること
- 本人、保護者の意思に反してサービスを行うこと

「正当な理由」とは、第三者の立場から見ても納得が得られるような「客観性」が必要ということです。

都の西北、積木の杜のステキな応援団。

早稲田大学のボランティアサークル「積木の会」の幹事長

篠原さんにインタビュー。

今年度初のあゆみだよりの企画として、いつもお世話になっているボランティアの方にインタビューをしました。今回は早稲田大学「積み木の会」幹事長・篠原さんにボランティアへの熱い想いをお聞きしました。

積み木の会は 1978 年創設の歴史のある大学公認のボランティアサークルです。あゆみの家では、積み木の会の皆さんが毎週のようにボランティアに来て、利用者支援の現場では、すっかりなじんでいます。いつも笑顔を絶やさない支援ぶりに支援員も積み木の会の皆さんには大きな信頼感、安心感を寄せています。

Q　篠原さんが、積み木の会に入ったきっかけは何ですか？

中、高時代はサッカーに夢中になっていました。体を動かすことは好きで大学でも引き続きサッカーをやりたいと思っていましたが、多分ついていけないと思って、その他の選択肢でボランティアを考えていました。ボランティアの言葉に惹かれ、いいイメージしかありませんでした。

「積み木の会」以外にもいろんなボランティアサークルを回りましたが、最終的に積み木に決めたきっかけは同級生の雰囲気であったりとか当事者意識であったり、関われる人たちの温かみのある雰囲気に惹かれました。入会を決めたのは１年の５月です。

Q　活動する中で大きく成長したと思うことは、どんなことですか？

入学当時は凄く周りの目を気にしていた自分がいました。俺は障害者と関わったり、こんなに凄い事をやっている、ボランティアをやっている的な優越感を持っていましたが、２年間数え切れない程の人達と会って関わった中で色々なことを吸収して、今は謙虚になりました。２年間で様々な経験をする中で、致命的な自分の欠陥に気づきました。介助する中で自分を批判的に客観的に見つめられて自分自身が謙虚になりました。

３ 年生になるとボランティアに対する考え方も少しは変わってきたりします。今の時期は新入生が入ってくる時期なので私が自ら発信し福祉の魅力を少しは伝えていきたいと心がけています。10 月の末には幹事長を交代します。

Q　篠原さんの将来の目標は？

将来は今までやってきたことを具現化できる活動をしたいです。少しでも人に何かを与えられる人間になりたいと思っています。それを実現できる新聞記者になりたいと思います。特に地方の新聞社へ行きたいです。２ 年次の沖縄旅行で現地の人に会い感じたのは一期一会の考えです。同じ目線で寄り添い、目の見えない人がいたらその目線にとことん寄り添いたいと思いました。顔の見える環境を大事にしたいと思います。

Q　新入生の入会きっかけはどんなものがありますか？

新入生含めると 60 人の大所帯で、メンバーも様々な考えで来た人が多いです。

新入生はボランティアの経験がある人もいれば新歓の説明会で興味持って来てくれた人もいます。様々な経験やバックグラウンドを持っています。入会したらボランティアの楽しいところを発見してもらっています。

Q　運営にあたって、幹事長としてどんなことを心がけていますか？

同じような方向性で試合に勝とうというテニスサークル等とは違い、ボランティアは、個人単位で参加できます。全体でミーティングをやろうとする際には、経験を持ち寄ってメンバー１人一人に想いを聞いています。メンバーは過去に色々な経験を持っています。幹事長として自分で色々な視点から物事を考えなければならない

と思っています。またボランティアはとことん楽しむようにしています。

Q　サークルを盛り上げるためにどんなことを考えていますか？

会員が集まる頻度は多くないです。次に集まるのは○月△日と決め、その中で新入生に意見を聞きます。　・大きなイベントは例えば「つみきフェスタ」を 11 月初旬（センター祭）に開催しています。

サークル全体として壁にぶち当たったとき、ミーティングを開いて意見を交わしあっています。頻繁にではないが、流動的にミーティングを開催します。自分のペースで気軽に参加できるのが一番の魅力だと思います。卒業後の進路は様々です。中には福祉の現場に就職する人もいます。

学内イベントではバリアフリールームを早稲田祭運営スタッフが設けていますが、積み木の会員の多田さんが早稲田祭スタッフですから、バリアフリールームを設けるとき経験が役に立っています。

私自身は、一年の時はサッカーサークルを掛け持ちしていていましたが、積み木の会の魅力に惹かれていきました。結局、サッカーの方は 1 年の時にやめて、積み木の会一本に絞りました。サッカーはメンバーのことは嫌いではなかったので今でも関わりはあります。今のサークルでサッカーに夢中になっていた高校時代の自分を客観視できるようになりました。味方へどういったパスが効果的なのか。サッカーを通じて教育するスポーツの可能性を全く関係ない福祉の現場から見られるようになりました。

関係ないように思われる学問がどれも繋がっているように、積み木の活動を経験して段々繋がりが見えてきたものは沢山あります。どんな小さな意見も聞き、現場のちょっとしたアイデアも必ず吸収するようにしています。そこから何かを考えるようにして、全体ミーティングでもルールとして意見を否定する事はやめます。相手の意見を聞き、自分のものとして発信するルールを作っています。

Q　積み木の会の魅力を漢字で簡潔に言い表すと？

道徳の徳で表せる　徳の字です。色々な徳の種類があるにしても、積み木の会で経験しているうちにそれぞれ何かしらの発見発展があります。動機は様々ですが目に見えない形而上学的なものではありますが普遍的な共通しているものが積み木の会メンバーにあります。居座りたくなるような心に余裕のあるアットホームな雰囲気に惹かれました。
目に見えない心のスイッチがあり、それが徳の一文字に表せます。徳というものについて無意識に経験、吸収出来るようになり、将来は徳を体現していきたいと思います。

Q　あゆみの家の印象は？

職員の寄り添い方が上手ですね。当事者の自立を目的としたというところで、その人の視点に立って食事、介助していると思います。職員の方はスペシャリストです。自分は技術的なものは持っていないですが、吸収するところは沢山あります。またあおぞらグループの川島万里さんとは顔見知りです。会員の多田さんや藤原さんもあゆみの家は楽しいと言っています。

【プロフィール】
篠原　光
早稲田大学公認サークル・積み木の会　36 代目幹事長
早稲田大学文化構想学部３年
栃木県益子町出身

積み木の会とあゆみの家の関係は長い歴史があります。そんな歴史のあるサークルをまとめる幹事長だけあって、サークルを盛り上げるにはどんなことをすべきか常日頃考えていることが伺えました。それができるのもボランティアに対する熱い情熱があるからこそでしょう。

篠原さんの第一印象は、一見、今時の学生ですが、話すととても活動的で、芯のある方だと思いました。大学には綺羅星の如く数多くのサークルがあり、その中で縁あって見つけた積み木の会で活動する中で、考え悩みながら自らのアイデンティティを構築しつつあります。卒業後もきっと“久遠の理想”を追い求め、人の気持ちに寄り添ったリーダーとして活躍することでしょう。そして、積み木の会の皆さん、これからもあゆみの家とのいい関係が続くように、よろしくお願いします！

我が街、落合⑫

春風に誘われて…“風のカフェ”に行ってきました。

お洒落な“風“の空間

あゆみの家に程近い落合第二中学校の向かいにお店はあります。店内に入ると思った以上に奥行があり、ゆったりとしたお洒落なスペースが広がっています。

入口の脇には観葉植物が置かれ、真っ白な壁には花をモチーフにした額が何点も飾られています。インテリアは白木のテーブルに淡いベージュの椅子など優しい色合いで統一され、ウッディーでナチュラルな雰囲気が漂う店内はまるで高原のペンションに紛れ込んだような気がします。このお店は特定非営利活動法人・工房「風」が運営するカフェで去年の12月にオープンしました。

工房「風」は、心の病を持つ方が地域の中で安心して生活できるように軽作業やお店の仕事など、就労の場を提供することを通じて自立や社会参加を支援している団体です。カフェをオープンしたきっかけは、長年お世話になっている「地域に貢献したい！」という気持ちから、自分たちにできることはないかと、あれこれ考えた結果がこの『風のカフェ』です。老若男女、様々な世代の地域の皆さんが気軽に寛げる憩いの場となれば…という思いから内装や小物選びもしたそうです。また、工房「風」の利用者（精神障害手帳を持っている方々）にお店で働く場を提供することで、地域の皆さんとの出会いや交流の機会を提供したい…という願いもあります。

繊細な押し花アート

お店の中は明るい日差しが入り、木の温もりが感じられるあたたかい雰囲気でとても心地よい空間が広がっています。きれいで清潔な印象の店内を見回すとさりげなく細やかな心遣いが随所に感じられます。例えば、テーブルの上に置かれた手書きの小さなメニュー表にはクローバーの押し花が貼られていてテーブル毎に違った花が楽しめます。

また、壁にかかっている額も一見絵画のように見えますが、これも押し花です。近くで見るとその緻密さと繊細さに驚嘆します。この額に入れられた押し花は、工房「風」で『押し花アート教室』をボランティアで開催されている先生の作品でメニュー表の押し花は利用者の方の作品だそうです。（中にはランプの作品もありとても素敵でした！）

メニューは飲み物すべて200円。焼菓子とセットメニューにしても350円。火曜日と木曜日限定のランチは1日20食の限定メニューで500円と、とにかく値段が安いです！

取材で伺った際、私も焼菓子セットを注文しましたが、出てきた焼菓子のパウンドケーキは、ラムレーズン入りのちょっぴり大人の味がする濃厚でしっとりしたケーキでした。ピーチジャムが添えられていて、とっても美味しかったです。

焼菓子は、パウンドケーキの他にロールケーキとマドレーヌがあって、日によって違うそうです。この焼菓子も工房「風」の利用者が作っている手作りのもの。だから心がこもっていて美味しいのかなと感じました。

ランチもトースト・スープ・ヨーグルト・ドリンク。日替わりでサンドイッチ、ドライカレーもありで500円とこれまたリーズナブルでお客さんには「値段はこれで大丈夫なの？」とよく心配されるそうです。それでも、一人でも多くの方にいらしていただき、喜んでいただきたいから値段を抑えているとのこと。

地域の憩いの場

去年12月のオープンから半年あまりたちました。オープンにあたって特に周知していなかった「風のカフェ」ですが、口コミで広がり日に

日に来客数が増えているそうです。取材した日も平日の午後でしたが、すでに店内には年配の男性の方がいらして一人静かに過ごされていました。その方が帰るとまた別の女性の方が見えるなど、お客さんが途切れることはありませんでした。スタッフの方のお話によると地域のいろいろな方がいらっしゃるそうです。工房「風」のスタッフや利用者などの関係者はもちろんのこと、近くの中学校のPTA、地域の高齢者のデイサービスのグループ、家族連れ、サークル仲間風の皆さんもいれば、男性客が一人でいらしたり、音楽が好きで店内のBGM(耳に心地良いクラシック)目当てに来る人もいらっしゃるとか。

入口には少し段差がありますが、スタッフが対応してくれるうえ、店内のスペースに余裕があるので車椅子の方やベビーカーの子ども連れの方もよくいらっしゃるそうです。

すでに2日に1回のペースで来店する常連の方もいるほどに地域の憩いの場になりつつある『風のカフェ』。オープン時の最初の想いである「地域の中で皆さんが集い、ゆっくり思い思いに過ごすことができる憩い場」「工房・風のメンバーの皆さんの就労の場」としての役割をこれからも果たせるよう、『風のカフェ』が1日も長く継続していけるように、心から願っています。

最後に

平日のひと時、ゆったりした時間を過ごしたいと感じたら是非『風のカフェ』にお出かけください。美味しいコーヒーと焼菓子そして高原の風が吹いているように感じられる素敵な空間があなたを待ってます！

【住　所】新宿区西落合1−8−16
【営業時間】11：00〜16：00
【定休日】　土曜・日曜・祝日

あゆみの四季

妙正寺川沿いの桜を楽しむ女子会
美女揃いの温泉グループです。

ミュージック・セラピーの風景。
みんなが大好きなプログラムです！

青空の下、みんなで水遊び。
シャボン玉に水鉄砲、楽しかった！

中庭の桜の木の下で、みんなの笑顔も満開！